[noto]　fonto: 「JBLE月報」第200号（1982年）
明らかな誤字は適宜修正したが、用語・表記の不統一や表現上の不適切な箇所はそのままとした

仏教エスペラントの想い出

浅野　三智

第一部

1　私とエスペラント

私が初めてエスペラントの初等講習を受けたのは、大正12年であった。その頃京都ではエスペラントは非常に盛んで、各大学にエスペラント会が出来、機関誌が発行せられた。後に岡山医大の教授になられた八木日出雄先生が、まだ京大の学生の頃で熱心に指導せられた。龍谷大学でも大正11年第1回の初等講習が開かれ、この方が指導せられたが、その年は病気のため受講できなかった。

翌年の1学期に同じ京大の学生だった吉町義雄氏を依頼し、毎土曜日10回の講習が行われた。私はその講習に参加したわけである。其時一緒に講習を受けた学生の中に稲田連氏（後の真田昇連氏）があった。この人は受講生の中でも最も熱心であった。この初等講習が終ってから直ぐ続いて受講者5、6人で“Krestomatio”を読んだが、常に稲田氏が指導的立場にあった。

大正15年ガリ版刷りの機関誌“La Sankta Tilio”を出した。その後昭和4年5月の学園祭の日にエス展を開き大成功を収めた。その展示会にヒョッコリ柴山全慶師が顔を出された。これが柴山師との面識の最初であった。

その年の8月から“Revuo Orienta”に野原休一氏のエス訳された「仏説阿弥陀経」が掲載されはじめたので、稲田氏と私と二人で南禅寺に柴山師を訪ね、この阿弥陀経を単行本に出版する働きかけを師にしていただきたいことをお願いしたが、師は確答はされなかった。

しかし、このエス訳「阿弥陀経」は間もなくJEIから出版され、働きかけの必要はなかった。昭和4年に南見善氏訳の「南禅寺小史」が出、昭和5年柴山師訳の「十牛図」が出た。

2　中井玄道先生

龍大の学生エスペラント会を開くにあたって、何の先生を会長にお願いするかという話が出た時、全員一致して中井玄道先生をと云うことになった。中井玄道先生は大正9年龍谷大学（当時は仏教大学）に奉職された。私は、大正10年に龍大に入学したので予科1年から3年までこの先生の「真宗要義」のご講義を聞いた。いつも布袍を召して教壇に立たれ、静かであるが熱のこもった講義に心を引かれた。「教行信証」の権威ある校訂出版をされ、真宗学、真宗史では独特の見解を持って居られた。

この先生は明治35年から5年間、本願寺開教使として北米シアトルに駐在されていたが、その時余暇にキリスト教の日曜学校も見学されたが、また一方エスペラントも独習せられた。明治35、6年というと黒板勝美氏がエスペラントの学習を始められたのが、明治36年で、明治39年にようやく横須賀に「日本エスペラント協会」が創立された位であるから、よほど高い見識を持っておられたことが分かる。

ご子息中井玄英氏に聞くと、玄道先生の用いられた独習書は　O'Connerの　"Esperanto, The Student, Complete Text Book" であったということである。

玄道先生は、今上陛下の御大典記念に昭和4年京都の円山公園の近くに仏教児童博物館を創設せられ、その主事として真田昇連氏（稲田連氏）が勤務した。JBLEの機関誌 "La Lumo Orienta" の2巻1号に "Budhisma Muzeo por Geknaboj" という表題で、この博物館の紹介記事が載った。この記事を見て、ドイツのエスペランチストWeidmann氏が問い合わせてきてこの人との交渉がはじまり、ドイツの児童教育資料を送られ、また日本とドイツの児童作品の交換もなされた。"La Lumo Orienta" の第3号に載った中井玄道先生の論文 "Pacmovado de Esperantistoj" はナチス一色化されようとしているドイツに住むWeidmann氏の心を強くうち、自分の意見を吐露した長い手紙を寄せたが、遂に世界大戦に突入し、エスペラント運動の一切は禁止された。その後この人は音信を絶ち戦後もどうなったか一切分からない。そして中井玄道先生は、終戦直前昭和20年7月23日68歳で世を去られた。

3　大谷大学のエスペラント運動

私はさきに龍谷大学の学生エスペラント会について述べたが、大谷大学のエスペラント運動は龍大のそれよりももっと早くはじまり、またはるかに活発であった。この部分は私の想い出の境域を超えた範囲で谷山さんや太宰さんにお願いすべきであるが、ついでに身辺にある記録によって記しておこう。

大谷大学のエスペラント会は大正10年初等講習会が開かれ、その直後、谷大の理事

者のひとりである細川教授[1]の発議により20名の学生によって結ばれたグループである。翌年2月機関誌“La Paco”を創刊した。仏教エスペランチストのグループとしてはこれが最初のものである。この会は以後5年の間谷山弘蔵、池浦氏等によって推進された。その間機関誌“La Paco”は10号まで出され「日出ずる国の大乗仏教の教えを世界各国へ伝える」という大きな夢を持って動いた。そしてその夢は無駄ではなく、十分にその任務を果たしたと云える。遺憾ながらこの会の活動はその中心となる人々が大正15年3月学校を卒業するとともに数年の間休止せざるを得なくなった。

4　日本仏教徒エスペランチスト連盟

私は昭和6年3月龍大の文学部研究科を終えて郷里に帰ったが、其の後京都在住の柴山全慶、太宰不二丸、稲田連氏等が話し合われ、当時東京でエスペラント学院を開いて活躍しておられた秋山文陽氏や、九州八幡市で済世軍エスペラント会を組織せられていた中西義雄氏等を糾合して日本仏教徒エスペランチスト連盟を結成し、その発会式が、前期仏教児童博物館で同年10月15日に挙げられた。その12月に機関誌“La Lumo Orienta”の創刊号が出た。この機関誌は、中外日報の小谷徳水氏や東京の神田寺の友松円諦氏等の寄稿もあり、文字通り仏教徒エスペランチストの総合機関としての任務を果し、昭和12年2月までに22号を出して終刊となった。この雑誌の主な内容を記すと次の如くである。[2]

1) 法華経薬草喩品エス訳	野原休一
2) 烏の復讐（雑宝蔵経第十）	南見善
3) 自分の肉で両親を救った王子（雑宝蔵経第一）	南見善
4) 聖徳太子憲法	高石綱
5) 仏と法	柴山全慶
6) 禅について	s-ino Adams Beck
7) El Sutro de Cent fabloj（百喩経物語より）	柴三郎
8) 吠陀の概念	甘蔗要
9) 無量寿経優婆提舎願生偈	山本胤通
10) 真宗の歴史	太宰不二丸
11) 仏陀の遺教	柴山全慶
12) 禅と生活	s-ino E.W.Everett
13) 三帰依五戒のエスペラント訳	柴山全慶

[1] 細川憲寿のことか？

[2] この機関誌は全文エスペラントなので、日本語のタイトルは筆者が読み手のために便宜的につけたものと推測される。

5　ヨーロッパの仏教エスペラント運動

日本に仏教徒エスペランチスト連盟が創立されるよりも、数年前にヨーロッパには国際的な仏教エスペランチスト連盟が結成されていた。私はこのことを “La Lumo Orienta” 誌上で知り、柴山師を通じて入会し、その機関誌 “La Budhismo” のnro3から講読するようになった。

クリスマス・ハンフレーズ氏の “The Buddhism in England” は有名な英文仏教雑誌であるが、この雑誌を編集していたマーチ氏が熱心なエスペランチストで、1924年にこの雑誌にエスペラント欄を設けてエスペラントによる仏教紹介を始めた。このマーチ氏の感化で仏教徒となったGeo H Yoxon氏が仏教徒エスペランチスト連盟を創立し、機関誌 “La Budhismo” を発行した。彼は自分で印刷機を購入し自分で刷り40ヶ国に及ぶエスペランチストに送本し続けた。

この機関誌は小粒ではあるが、非常に内容は充実していた。今その主な記事を挙げると次の如きものがある。

1) Dhammmapada（法句経）
2) Dialogo inter Ŝariputo kaj Jamako
3) La Filozofio de Laboro
4) La Vera Budhismo
5) Kial CHAO KUNG Fariĝis Budhano?
6) Skizo de Zen Budhismo
7) Kredo
8) La Mahaparinirvana Suto
9) La Kvar Brahmaj Animstatoj
10) La Fundamentaj Principoj de Budhismo
11) Budhana Afirmo
12) La Konvertiĝo de Ŝariputo kaj Mogalano
13) Disvastigo de Budhismo
14) La Granda Rezigno
15) Budhismo laŭ Okcidenta Vidpunkto
16) Budho kaj Kristo

6 “La Revuo Orienta” 仏教特集号

昭和9年7月JEIは“La Revuo Orienta”を仏教特集号として編集し、全頁を仏教関係の記事で満たした。これは、日本の東京、京都、大阪で開催される汎太平洋仏教青年大会の会期が迫っていること、この大会に初めてエスペラントが日、支、英三ヶ国語と並んで公用語として採用されていることなどの条件が重なっていることも理由であったが、その当時のJEIで新撰和エス辞典の出版に専念しておられた岡本好次氏の行為を是としなければならない。岡本氏は山中温泉の竹内藤吉氏と親交があった。この号の目次を見ると次のような記事が盛られている。

- 汎太平洋仏教青年大会のエス語採用
- 仏教とエスペラント　友松円諦
- 日本文化におけるエスペラントの影響　柴田道賢
- Budao 礼讃　小坂狷二
- 野原、Kial ne “Budao”? を読みて　松葉菊延
- エス・梵・巴語音私考　竹内藤吉
- 仏教　竹内藤吉
- 仏教関係エスペランタージョ　柴山全慶
- 仏教及びエスペラントに於ける民族主義の問題　清水順吉
- 国際的仏教エスペラント団体　柴山全慶
- ホマラニスモと仏教　須磨一郎
- 第二回汎太平洋仏教青年大会について　中西義雄
- 四諦　志摩三郎[3]
- 本性比丘尼　山本胤通
- 我とは　田中国雄
- 仏教述語集

岡本好次氏とは一面識もなかったが、昭和31年第42回日本エスペラント大会が吹田市であった時、「先輩を囲む座談会」であったと思うが、岡本氏のお言葉を聞いたその時は、既にガンが進行していて、お声も小さくよくは聞き取れなかったが、grava という語がしばしば聞こえるので、ご病気が大分重いのだと思っていたが、翌年3月13日に亡くなられた。

第2回汎太平洋仏教青年大会は予定の如く、同年7月18日から26日まで東京、京都、大阪で開かれ、仏教エスペランチストとしては中西義雄、竹内藤吉、山本胤通（後の亘至道）氏等が参加された。

---

[3] 著者名は原本では Saburoo Ŝiba（さぶろう　しば）である。漢字表記不明。第4節に言及された「柴三郎」のことか？しかし「司馬」か「斯波」かもしれない。

7　大戦前に刊行された仏教エスペラントの図書

仏教エスペラントの運動は多少の消長を見つつも続けられてきたが、日支事変の起こった昭和12年頃から継続困難となった。その年頃までにJBLEから観光された図書は次の如くである。

1)	エス訳「聖徳太子十七条憲法」	昭和7年刊	高石綱
2)	〃　「法華経普門品」	昭和8年刊	野原休一
3)	〃　「法華経化城喩本」	昭和11年刊	野原休一
4)	「アソカ王の法勅と小伝」	昭和12年刊	岡崎霊夢
5)	エス訳「法然上人伝」	昭和12年刊	西田亮哉

この他JBLE以外の機関から発行された仏教エスペラント書には、次の如きものがある。前記南禅寺小史、阿弥陀経の他

1)	仏陀伝、昭和8年刊（自費出版）	竹内藤吉
2)	暁烏敏「日本精神」	
3)	「方丈記」	野原休一訳
4)	「日本書紀」全訳5巻	野原休一訳

（これは仏教だけではないが仏教関係の記述が多く入っているので加える）

昭和12年7月世界情勢は悪化し、ついに日支事変勃発して総ての平和運動は許されなくなった。その年11年に出されたJBLE-INFORMILO終刊号に編集子は次のように述べている。

「昭和6年5月エスペラントを以て、東洋の至宝仏教を全世界のエスペランチストを通じて宣布したいという念願のもとに、京都の同志が仏教エスペランチストの活動を提唱して以来、満6年以上にもなった。時代は急角度に転回して、欧州大戦後に世界を風靡した国際親善の風潮は次第に消え去り、国家と国家、民族と民族、思想と思想が激しく相克する有様となった。この人類にとっての不幸が如何なる病根から生じているかについては様々な意見があるであろう。然し眼前の事実は一時「文化の諸部面」を考える余裕のない所謂「非常時」の状態であることは一つである。

かかる時代に文化の一役割であるエス語運動が花やかでないのは当然の成行きである。吾々はこの相克が解消されて人々が「文化」をかえり見る落ち着いた生活を持つ日まで、あらゆる困難と戦って定められた目的に進んできた道ではあるが、一時積極的な仕事は中止して退いて自己の余力を蓄えることとしたいと思う。仏教エス運動史に少なからず足跡を残してきたことをせめてものよろこびとして暫く隠退しよう。

世界は動く。やがて遠からずして「文化」に恵まれる日が来るであろう。その日こそさらに手をとり合って人類のために自分たちの使命を捧げることにしよう。」

第二部

1　エスペラントへの復帰とJBLEの再建

昭和20年私の長男は広島市の崇徳中学に入学した。一学期が終っても、市内の疎開家屋の後始末の作業につくため帰省しなかった。8月6日朝広島方面に出かけたが、突如原子爆弾は彼の生命を奪った。終戦の日市外の親戚の家の仏壇にまつられた彼の遺骨に会い、廃墟の広島市をトボトボと歩き、広島城の天守閣の焼跡に立って一望焼野原の市内を見渡した時、私の心を突いたものは、米国への復讐の思いではなくて「仏法の世界へ」の願いであった。

帰宅の後、私は英語の力をつけるために、まず英文バイブルを読み始め、続いて英国文学史を読んだ。エスペラントには全く希望を失っていたからである。こうして数年を経た或る日「本願寺新報」に載った一つの記事が私の目を射た。

それは曽て正信偈のエス訳をされた宮崎県の河野誠恵師がスエーデンに住むドイツ人ルドルフ・ペトリ氏とエスペラントで仏教について文通しはじめられたという記事であった。エスペラントがまだ生きていて仏教宣布に活用されているのか。私は非常に嬉しかった。早速河野師に問い合わせると柴山師、太宰氏、野村利兵衛氏などもペトリ氏と文通しているということであったので、それらの方々にも手紙を差し上げ、自分もペトリ氏と文通するようになった。ペトリ氏は仏教エス運動の日本の代表者を求めているのであるが、柴山師は宗派の要職に就かれ、太宰氏は大谷大学の学友会の仕事で手一杯ということで止むを得ず私がJBLEの復興の準備をすることとなった。

先ず、旧会員の糾合をする必要があるので、太宰さんから会員名簿を送ってもらい、Informiloを作り旧会員の全部に送り、JBLE再建についての意見を聞いた。約10年の空白の間に死亡した人もあり転居して新住所の分からぬ人もあり、返信を受けたのは三分の一にも足らなかった。しかし、JBLEの再建を望む人が可成りあったので、兎も角早く会合を開く必要があるので時期を待っていたが、昭和26年9月23、24日と名古屋で第38回日本エスペラント大会が開かれるので、この大会に仏教分科会を開くよう準備してもらうことを愛知県の山田義秀氏に願いした。

このときの大会会場は名古屋市の東区役所であったが、分科会は湯の山の「山の家」で開かれた。仏教分科会にあてられた部屋は4畳半であったが、出席者が8名であったのでちょうどよかった。8名とは山田義秀（愛知）、野村理兵衛（富山）、白木欽松（滋賀）、三輪義明（愛知）、早川克長（愛知）、古賀史郎（福岡）、太宰不二丸（京都）、浅野三智（愛媛）という顔触れであった。この時三輪氏から「国内仏教徒エスペランチストの組織を早急に作ること」という提案が出され議決されてJBLE再建に踏み出すこととなった。

昭和27年9月23日と24日京都大学の西部講堂で開催された第39回日本エスペラント大会に仏教分科会を開いたが、この分科会は太宰さんのお世話で東本願寺の枳殻邸の一室が会場にあてられた。出席者は柴山全慶、太宰不二丸、寺井利一、秋山文陽、山田義秀、真田昇連、竹内藤吉、勝山大進、丹羽正久、谷山弘蔵、浅野三智の11人であった。

その翌日9月25日から東京築地本願寺を会場として、第2回世界仏教徒会議が開かれた。この会議に参加した国はアメリカ、オーストラリア、ブラジル、ビルマ、セイロン、インド、ペナン、ネパール、ヴェトナム、タイ、フィリピン、中国、香港、フランス、日本15カ国で殆ど英語が用いられた。

三輪さんと二人でエスペランチストが参加しているであろうかと探したが分からなかった。後からオーストリーのヘルメット・クラー博士がBLEの会員であると分かったが、この人には会うこともできなかった。その日の日記を見ると感想として次のように書いている。

「用語の点では南方諸国の人は皆英語が達者であるが、一部を除き殆どアジア人の会合である仏教徒会議に英語を公用語のように使用することはどうであろうか。中立の国際語の必要を切実に感ずる次第である。」

2　ヨーロッパの仏教エスペラント運動の其後

ヨーロッパでは、大戦後英国のヨクソン氏は経済的に無理がいって立てなくなっていたが、ドイツのブレィビッシュ氏が仏教エスペラント運動を再建していた。この人は、曲譜附の仏教讃歌を作るなど非常に熱心ではあったが、その運動は国内に限られ、余り国外への呼びかけはなされなかった。ペトリ氏は、これを広げて国際的運動とすることを図り、友人である英国の婦人マーガレット・イー・ボーデン女史を誘ってBLE再建を志し、世界への呼びかけをはじめた。

彼は、1948年（昭和23年）ヨクソンの出していた “La Budhismo” の号数を継いで、“Dharmo” n-ro 19 を出し、n-ro 25からは誌名を “Budha Lumo” と改めた。日本でもBLE会員になる人が次第にでき、この会員への機関誌は部数をまとめて私の方に送ってきた。

昭和27年から日本の会員の会費をまとめて送金する手間を省くため、四季刊の内2回を日本で刊行し、外国の部数だけを英国に送ることにした。こうして n-ro 32 が発行された。この日本版は毎回野村利兵衛氏がタイプ印刷を引き受けて下さった。ペトリ氏は其後渡印したので機関誌の発行は殆どボーデン女史を煩わすこととなった。

このボーデン女史は一生独身で通したがBLEのために献身的に働いた。機関誌の発行ばかりでなく筆まめに手紙を書いた。いつも長い手紙でタイプが打てない場合（夜遅く隣室に寝ている妹達を目覚まさないため）はペン書した。 “Budha Lumo” はn-ro

60からカナダのエイコルツ氏が引き受けて活版印刷となったが、その翌年n-ro 62を出したのが最後で、女史は1961年3月60歳で病死した。ボーデン女史の訳書に次の一書がある。

Ekrigardo al Budhismo　これは仏誕2500年を記念して出版された本で、原著は英文でビルマのソニ博士の書かれたものである。

ペトリ氏は其の後印度からチベットに入りベトナムに長く住んだ。ベトナム在住中下記の二書を出版した。

1) 仏陀は斯く語る　　1971年刊
2) エス訳「法句経」　　1973年刊

3　浅田一博士のこと

法医学博士の浅田一先生は大戦前の “La Revuo Orienta” にご自分の専門の分野である法医学に就いてはしばしば論文を寄せられていたが、その中に「病気と死—仏教と科学」という題の論文がある。先生はこの頃から既にJBLEに入会せられてあった。戦後旧会員を糾合するための手紙を差し上げたとき、先生はいち早くご返事を下され、「私は病臥中なので何もお手伝いはできないがつづいて会員となるからよろしくたのむ」というご手紙で、私はこのお手紙に旧知のような親しさを覚えた。私は当時観無量寿経のエス訳を試みていたので、その校訂をお願いして手紙を差し上げたところ「私は専門の仕事が沢山ある上、今病臥中であるのでお請け合いできない」というご返事であった。しかしその後から日本版の “La Budha Lumo” n-ro 32にご寄稿をお願いしたところ、快くご承諾下さって “La Darmo” と題して送って下さった。その後4日遅れていただいたおハガキには先生は原稿を書かれた後に発熱したとあり恐縮した。

先生は以前の “La Revuo Orienta” の論文では「仏陀の教えは先ず私たちに完全な知性を持つべきことを教え、第二に自然の法則と社会の法則に従って生きることを教え、第三に如何にして社会に平和をもたらすかを教えられた」と見られているが、 “La Darmo” の方では、「凡ての生類の中で頭脳ある人類が他の獣類を辺鄙の場所に追いやりよい場所を占めて発展した。そして獣や魚や野菜を食べた。人口の少ない間は生産物の糧はそのままで足りたが、人口が増えてくると生きるに困難となった。そこで戦争が起こり、強きものが支配し弱きものは追われた。戦争でも沢山な人が死んだが、不思議なことに伝染病で猶多くの人が死んだ。

それを引き起こすものは肉眼では見えぬ小さな微菌で、宇宙はこの微菌にも同じ生存と生殖の能力を与えた。彼等の一つ一つは非常に小さくて弱い。しかし無数に沢山のものの結合で人々を殺す能力を持った。人は新しい薬物を作って微菌を殺した。しかし微菌はこの薬物に抵抗する能力を持った。其の様にして人は常に彼等と戦った。私たちの頭脳は印刷、船舶、飛行機、ラジオ、テレビ、原子爆弾などを発明した。現実に広島と

長崎に落とされた原子爆弾は同時に幾多の人の生命を奪うた。そして戦争を終わらせた。今は益々ひどい原子爆弾が作られつつある。若し原子爆弾と原子爆弾との戦争が始まるならば、我々の地球は破滅するに違いない。宇宙は人々を思うままにさせている。若しも地球が破滅しても宇宙は後悔することはないであろう。何故なら宇宙は沢山の遊星を持っているからである。私たちは唯僧伽の原理に従って地球上の平和を保持することに努めなくてはならない。」と云われている。

4　第50回世界エスペラント大会

旧会員の糾合ばかりでなく私たちは新しい会員の獲得をしなくてはならなかった。そのため中外日報を通じて内外の仏教エスペラント運動を紹介した。当時中外日報社には小谷徳水氏があり、エスペラントには非常に好意を持ち投稿すれば必ず掲載された。

また一方JEIの機関誌 “La Revuo Orienta” の団体名簿の中に、JBLEの名を入れてもらった。斯うして入会を申し出られた方が幾人かあったが、その中に大分県の金谷経生氏と福岡の加藤教順氏があった。共にまだ30才代の若い方であった。

世界大会に仏教分科会が開かれたのは、1956年（昭和31年）が初めで、マルセイユで開催された第42回大会でそれからつづいて1959年まで各年に開かれている。ヨーロッパの大会に仏教分科会が開かれ、日本の大会に開かれないことは不合理であるし、しかも日本で開かれる世界大会でキリスト教分科会があって仏教分科会がないというのは不面目きわまりない。こう考えて私たち（金谷、加藤両氏と自分）は大分県別府の本願寺別院に会して話し合い、この50回世界大会に仏教分科会を開くことを決めた。昭和40年7月31日から8月7日まで東京都の東京文化会館で開かれた第50回世界エスペラント大会は参加者は45カ国1666人という盛会であった。仏教分科会は8月1日午後で同会館の特別会議室で開き、参加者はカナダ1名、オーストラリア2名、ニュージーランド2名、デンマーク2名、イギリス2名、フランス3名、オランダ1名、ハンガリー2名、不明6名と外人21名、日本23名で計44名の出席者であった。柴山全慶師に講演を願う予定であったが欠席されたので、太宰不二丸氏が同師の講演「禅における自由に就いて」[4]を代読し来会者の全員に、用意してあった “Historieto de Japana Budhismo” を贈呈した。この大会にサイゴン在住のペトリ氏、セイロンのニャナサッタ比丘、ポーランドのミシーヴィッチ、ベルギーのブリィ氏らがメッセージを寄せた。外人の自己紹介では自分の仏教観を述べる人もあったが、金谷経生氏は次のようにまとめて仏教タイムスに発表した。「2、3の人を除き仏教についての知識はまだまだ皮相的なものであったが、しかしその関心は異教に対する興味本位の単純なものではなく、東洋の智慧である仏陀の教えの中に、西欧文化の中には見出しえないすぐれた輝かしい何ものかを発見

[4] 原文は日本語で、エスペラント訳は太宰不二丸 （“Libereco de Zen”）

し、これを自己のそして人類の指標にしようという宗教的或は哲学的欲望の熱意が言外にあふれていた。また仏教国としての日本の指導の役割に期待する声も聞かれた。」

5　仏教語彙について

エスペラント文を書くにしても、また書籍をエスペラント訳するにしてもTerminaroの必要なことは云うを待たない。仏教エスペラントのTerminaroを発表した最初のものはヨクソン氏で、二、三の友人の協力を得て機関誌 “La Budhismo” の最初からn-ro 12までに掲載した。そのn-ro 3に野原休一氏が雑誌“La Libero”で阿弥陀の訳語に就いて批評したことを述べてその弁解をしている。それは野原氏はヨクソン氏が阿弥陀をそのままAmidoとエス訳しているのを不可とし “Amitabho” とすべきであると非難したことに就いてである。

支那、日本では阿弥陀（アミダ）と呼ばれているが、原語はAmitabhoである[5]。この野原氏の批評に対してヨクソン氏は「しかしAmidaは既にヨーロッパの二、三の国語に用いられて居り、国際的になっているから我々はAmidoとした」と云って居るが、これは野原氏に従う方が良いと思われる。

ヨクソン氏はこのVortaroの最後に次の様に書いている。

“Ni almenaŭ provizore, de nia “Vortaro de Budhismaj Terminoj” jen atingigas[6]. Kelkaj anoj fervore helpis, tiel ke la laboro estas entute abelo[7] de la Ligo. Bedaŭrinde ni ne povas eldoni ĝin kiel aparta verko. Sed tamen ni povas uzi ĝin kiel bazo en niaj estontaj laboroj.”

昭和9年に竹内藤吉氏がガリ版刷りで“Budhisma Fakvortareto”を出した。これはチルダースの巴利語を英語からエス訳したもので、実に精力的な訳著である。また“Japana Budhano”に松本茂雄氏が“Budhisma Terminaro”として連載されたものはエス日、日エスの二部に別れ、語彙は可成り豊富である。斯うした先人の努力に対して、未だに仏教語エスペラント辞典の刊行されていないことを遺憾と思う次第である。

6　高原憲先生と私

昭和38年の8月“JBLE月報”がn-ro 100に達したので、仏教徒エスペランチストの論文集を出した。その時、長崎市の高原憲博士から“Siferenceco kaj Egaleco”という題のArtikoloを送って下さった。高原先生を私がどうして知ったかは思い出せないが、こ

---

[5] サンスクリットでは正確にはAmitābha、あるいはAmitāyus

[6] atingisのタイプミスか？しかし目的語を欠くため意味がはっきりしない。

[7] これもタイプミスか？abeloは「蜂」である。元が何なのか推測できない。

のn-ro 100を出す少し前からに違いない。先生はこの号の出た年に入会して下さり、その翌年には新著「水の味」を御恵贈下さった。

この先生は自らKuracisto por malriĉulojを以て任じ、水の効果を説き水を飲むことをすすめられたので「水の先生」とも云われた。東京の第一高等学校の学生であったとき、求道学舎の法話会に通うて近角常観先生の感化を受けられ、長崎市に病院を開設されてからは、常に患者に法味を語られた。

75歳頃から自著「水の味」をエスペラント訳することをはじめられていたが訳業は終られたが、昭和45年2月78歳で亡くなられた。歿後加藤教順氏が長崎市に行かれたとき、先生のお宅を訪問され、歎異鈔のエス訳とともにこのエス訳「水の味」の遺稿を譲り受けて帰られた。私はそのエス訳「水の味」の方を随時月報に載せたが、昭和51年“Gusto de Akvo” としてJBLEから出版した。

高原博士は若き頃、近角常観氏の感化を受けられたが、後には同郷である山本晋道氏、また山本氏の先生であった顕真学苑の梅原真隆先生の教化に浴された。高原憲先生が亡くなられた後は、ご子息の誠先生が是真病院を引き継いで経営せられ、JBLEの会員にもなって下さってある。また「ホスピット」という病院の機関誌を月々出して居られるが、この雑誌に「父の印象」と題して、憲先生の日常生活を紹介せられていたので、これをエス訳して “La Japana Budhano” n-ro 78からn-ro 82までに連載した。これで見ても先生は実に淡々たる生活を送られていたことが分かる。

7　エスペラント大会仏教分科会

昭和41年第53回日本エスペラント大会は8月21日22日2日間名古屋の南山大学で開催された。南山大学は小高い山の丘にある静かな新しい学舎である。仏教分科会は第2日の午前9時から開かれ出席者は脇坂智証、金谷経生、佐藤晃嗣、早川克長4氏に自分とJBLE会員は5名であったが脇坂さんのご子息春夫さんが出席され、中井保造先生が尾張高校の先生4名を連れてこられたので計11名となった。

議題は　1)私たちの会を新しい会員を獲得して活気あらしめるための方策、2)外国の仏教徒エスペランチストと文通を盛んにしよう、という二つであった。討議の結果、1)現在は高等学校へのエスペラントの働きかけは非常に困難な状態にあるが、できるだけ知人を通じて仏教関係の学校にエスペラントの学習会を作るよう働きかける。2)BLEに対し会員名簿を送らせ、その中からめいめいが選んで文通をはじめること。となった。

昭和42年第54回日本エスペラント大会は、7月8日、9日京都の京都文化センターを会場として開催された。仏教分科会は、さわ屋旅館の二階の一室で、西光義敞、早川克長、加藤教順、金谷経生、脇坂智証、太宰不二丸、谷山弘蔵、中村久雄、榎山時次郎、三ツ石清、水畑通泰、浅野綜丸氏等と自分と13名であった。谷山弘蔵氏が司会され

た。金谷さんがBLE会長ブーリイのメサージョを読み中村久雄さんが印度仏蹟巡拝の話をされた。

昭和43年第55回日本エスペラント大会は、8月3日、4日両日サッポロの中島公園のホテルアカシアを会場として開催された。

仏教分科会は、第二日午前9時から5階の1号室で開かれ太宰不二丸、金谷経生、早川克長、千葉金三、中村久雄氏らの5名にドイツ人ノイマン氏と自分との7名であった。この会に月報の他にエス文のみの機関誌発行のことを諮ったが、時期尚早ということで否決、月報に併せてエス文欄を設けることとなった。また毎年弐日エス大会を機会にJBLEの総会を開く、但し総会は大会分科会を兼ねることが出来るという項は成文化しないことになった。

尚、JBLE会員以外で仏教分科会に出席した人をJBLE準会員として名簿に加えることとなった。

この分科会に出席したノイマン氏は東京に来て3年間在住した人であるが、昭和49年2月5日死亡した。親友であった小原孝雄氏の追悼文によると、病気は憂鬱症であったという。仏教分科会に出席したことは、精神的に何かを求むるものがあったのであろうが、何も与え得なかったことを悔む。

昭和44年東京開催の大会では、仏教分科会は開かれなかった。

昭和45年第57回日本大会は7月25、6両日高槻市で開催され、第2日の午後1時から仏教分科会を開いた。出席者は太宰不二丸、西田亮哉、金谷経生、真田昇連、亘至道、中村久雄、柿本真佐代、西本勝次、池田弘諸氏と自分とで10名であった。今日の協議の焦点はボーデン氏の死去の後殆どBLEの活動が停止状態となっているので、BLEの会費の半額をJBLEの活動資金としてはという西田さんの主張があって論議したが、結局もう一年の状況を見てからということになった。来年はJBLEの創立満40年になるので、法華経のエス訳をはじめることになった。

8　柴山全慶老師と私

柴山さんは、1894年11月30日に愛知県の地主の家に生まれた。14歳の時妙心寺派の僧籍に入り、後学問のため京都に上った。関西大学に入学したが、中途で意を翻して南禅寺の河野霧海老師の門弟となった。

1923年に南禅寺の塔頭であった慈氏院に入寺された。翌年エスペラントを独習し、1930年十牛図をエスペラント訳し“La Dek Bildoj de Bovpaŝtado”として京都の仏化社から出版された。

昭和6年太宰氏、稲田氏と協力されて、日本仏教徒エスペランチスト連盟が創立されたことは第一部で述べたが、その後JBLEの機関誌“La Lumo Orienta”に毎号執筆されるばかりでなく編集に奔走努力せられた。

またJEIの“La Revuo Orienta”や「国際仏教通報」などに仏教関係の論文、著書などの詳細な紹介をせられるなど、その活動業績は素晴らしいものがあった。戦後は南禅寺の専門道場長となられ、つづいて管長に就任されたので寸暇もなくなられて、実際活動からは遠ざかられたが、仏教エスペラントに対する熱意は失われなかった。私が連盟の主事として、この運動を進めていた間中、常に精神的にも物質的にも後援をつづけ、シバシバお手紙を寄せられた。今そのお手紙の中の一つを拾うて見ると、昭和27年12月から15日間ビルマで開かれた世界仏教徒会議に参加されて帰られた、直後のお便りの中に次のごとき一節がある。

「仏教徒会議の様子は、大体東南亜は英語の勢力下に永年あった国々ですから皆英語は達者です。会議の間中殆ど英語が使用されましたが、何よりも先ず何十カ国と云う代表が一つの中立した言語で意志が通じる様に国際補助語を実用化する様に努力することが先決問題であると感ぜられました。力のある国が、自分の言語を他の国へ押しつけようとすることは、已にそれ自身平和の精神にも背く意味を秘めていると思います。」

老師は昭和34年12月20日に南禅寺派管長に就任されたが、その当時のお手紙に

「昨年の暮れに私は南禅寺派の管長に就任し、専門道場の師家を兼任することとなりました。そんなことで身辺が忙しくJBLEの運動からも益々遠ざかるばかりですみません。しかし心持ちだけはいつも仏教エスペラント運動の支持を惜しまないつもりであります。」と記されてある。

9　ヨクソン氏の死去　―　その継承者たち

昭和54年（月日不明）BLEの創立者であった英国のヨクソン氏が死去した。

ヨクソン氏からの最後の手紙は昭和50年でその手紙には若い頃活動した往時を回想して太宰不二丸氏や稲田昇連氏などと文通していた昔をなつかしがり、其の最後に「あなたは現在73才であり、私は77才である。共に年を拾った。現在まで仏教エスペラントの運動がつづけられてあることは嬉しいが、もっと若い人たちがこの運動に参加し、生々とした活動がなされることが望まれる。」と書いて居る。

ヨクソン氏は、大戦後運動からは退き、ペトリ氏やボーデン女史の働いたことは前に述べたので、ここにはそれを継続して仏教エスペラント運動をつづけた人たちを回想したいと思う。

昭和30年頃のことであるが、花園大学の緒方宗博教授がヨーロッパを旅行された際フランスのニース空港に降りられると、見知らぬフランス人のエスペランチストが話しかけてきた。「あなたが来られることを知って一夕仏教講演をしていただこうと思って準備しているのでお願いする。」と云うことであった。余り切実な願いだったので他の予定を変えて60人ばかりの人々に話したと緒方先生は云われている。これがリビラール氏で、その時はニース空港に事務を取っていたのである。

このリビラール氏は以前UEAにも居り、世界エスペラント大会に仏教分科会を初めて開いた人である。太平洋のタヒチ島にかわり、ここに移っても数回手紙を呉れたが、とうとうこの島で病死した。

ボーデン女史が亡くなった後1、2年ヨーロッパの仏教エス運動が途絶えていたが、いろいろと奔走して、この運動を復興したのはベルギーのリェージに住む、エム・ブーリイ氏である。この人は、1962年BLE帰還し“Budhana Kuriero”を発行しはじめた。1969年までに32号を出して終った。その間に東南亜のヴェトナムに争乱が起り、仏教僧の焼身自殺があった頃は、臨時号を数回発行して停戦を叫んだ。その後どういう事情か雑誌をフランス語に切り替えた。

ブーリイ氏の後をついで“Budhana Kuriero”の刊行を進めたのはドイツのモラーヴェツ氏で同じドイツのシュレーダー氏がこれを助けた。モラーヴェツ氏は“Budhana Kuriero”の他に「満月の夜の便り」という小冊子を作り、英語も仏語も解せないような国で仏教を求めている人々に送って居る。また“Folieto”という小型の冊子も配布して大いに活動して居る。

シュレーダー氏は1979年スイスのルツェルン市で開かれた第64回世界エスペラント大会に仏教分科会を開いて“Budho kaj Modernaj Homoj”という題で講演した。この講演は単行本としても出ている。

翌年ストックホルムの第65回世界大会にも仏教分科会を開いたが、このときは日本仏教を紹介するから日本の寺院、仏像のスライドを送れということで、数種類送ったが、シュレーダーの手許には届いたが、会場に運送した手荷物が遅れて紹介することが出来ずに終り残念がっていた。

10　噫、西田亮哉さん

昭和53年3月28日に京都の大谷婦人会館でJBBLE総会を開いた。参加者は太宰不二丸、西田亮哉、中井玄英、亘至道、隅谷信三、松本茂雄、早川克長、今井正毅、浅野三智の9名であった。この会でJBLE満50周年記念事業の一つとして柴山全慶老師のエスペラント文集を出版することが決まった。後、西田亮哉氏から今年1月MacGillを伴いニュージーランドのエスペランチストを訪ねての旅行談があり、つづいて太宰不二丸氏のスリランカ、インド仏跡参拝のお話があった。三階の仏間で真田昇連氏の追悼読経があった後解散し、後は清滝のます屋に宿泊、西田、太宰両氏の旅行のフィルムの鑑賞をした。

この総会には元気に出席して下さった西田亮哉氏が4月22日急逝されたことには全く驚いた。私には仏教エスペラント運動の一角がくずれたように淋しく感じられた。氏は岸和田市の浄土宗西方寺に生まれられたが、ご尊父もエスペランチストで氏がエスペラントの学習を始められたのもご尊父のすすめによるものであり川崎直一先生の指導を受

けられた。昭和10年関西大学を卒業せられ、昭和12年には石井真峰氏の法然上人伝 “La Vivo de Hônen” を、出版された。大戦前には一時62カ国のエスペランチストと文通せられるほどの熱心さであった。その頃プロレタリアの雑誌や出版物をしきりに読まれたため特高課から目をつけられ憲兵隊が家宅捜索をしたこともあったと自分で云って居られた。高等学校に奉職されてからは多忙のためエス運動から遠ざかられていたが、退職後再び活動を開始せられ、昭和48年には “Vizito de Monaĥejo en Kioto” を、昭和53年には “La Vervekiĝo de Budhismo” を出版された。

昭和51年8月21,221両日名古屋で開かれた第63回に本エスペラント大会に私は参加しなかったが、西田氏が司会者となって仏教分科会が持たれた。会場は禅宗の名刹定光寺で、出席者は只石ミスヱ（東京都）、中谷明子（大阪市）、大田新一（豊橋市）、脇園久美子（大阪市）、武市治子（守口市）、鈴木秀一（大阪市）、浅岡馨（大阪市）、西田絢子（岸和田市）、佐々木孝丸（調布市）、西田亮哉（岸和田市）、池田弘（豊中市）氏等の11名であった。この会では佐々木孝丸氏が秋田雨雀の例を引いて仏教についての理解を述べられ、それに就いて仏教と他の宗教との関係またマルキシズムとの関係なども話題に上って活発に討議された。中途から定光寺の住職も出席され、禅についての解説また現今の仏教の状勢についてのお話もあり、話は尽きぬ有様であった。この会ではJBLE会員外の参加が目立つ。

11　JBLE創立満50周年

昭和56年はJBLE創立満50周年にあたるので、その記念事業の一つとして柴山全慶老師のエスペラント文集を編纂出版しようということは早くから決まっていた。柴山老師の書かれたエスペラント文には昭和5年出版の「十牛図」エス訳があるが、其の他 “La Lumo Orienta”, “La Paco”, 「国際仏教通報」, “La Revuo Orienta”（仏教特集号）等に載せられたものがあるので、先ずこれらのものを一応松本茂雄さんから川崎直一先生に頼んで目を通してもらい、これを随筆、翻訳、運動、と分類しそれに附録として柴山老師の小伝を入れ、最後に註を加えた。54年9月10日刊行す。

昭和54年8月11、12両日、神戸海員会館で開かれた第66回日本エスペラント大会の際、開催した仏教分科会の出席者は、三輪義明、西本勝次、吉田肇夫、佐々木孝丸、礒部晶之助、北原二郎、西海太郎、A.D.Blatt　MacGill、浅野三智の10名で、礒部晶之助氏からドイツ旅行中に熱心な仏教徒のドイツ人に会い色々と仏教のことを聞かれるので、仏教の知識を身につけて置かねばならぬと痛切に感じたと話される。

また、西海太郎氏は華厳経のドイツ語訳のことを語られ、この経典のエスペラント訳も是非なされてほしいと語られた。

昭和55年8月23、24両日横浜の開講記念会館で開かれた第67回日本エスペラント大会の際開催した仏教分科会の出席者は、三輪義明、脇坂智証、隅谷信三、MacGill、南

見善、山下哲郎、礒部晶之助、北原二郎、前田米美、山崎雄一、樋口富史、原初五郎、浜田由美子、西海太郎、三輪和、浅野三智の16名で、三輪氏から東京の仏教伝道協会発行の和英対照「仏教聖典」をエスペラント訳して、同協会から世界に配布していただくよう請願したいという議案が出て、全員一致で賛成し実働することとなった。

この分科会の後、私から聖典エス訳分担して下さるかどうかを問い合わせて分担の意思を表明して下さった方は、下記10名の方々であった。なお、呉市の吉田肇夫氏には長町義昭氏がご協力下さることとなった。

MacGill、亘至道、今井正毅、山崎雄一、北原二郎、太宰不二丸、吉田肇夫、
池田弘、三輪義明、浅野三智

初め、訳語の統一の話し合いはしたが、何分遠方に離れていて、度々会合を開くことも出来ず、訳されたものを一応誰か出来る人に目を通してもらう必要があり、野村利兵衛氏にお願いしたが、この方は目下ザメンホフ用例集の出版で非常にご多忙のため同氏から高岡市の角尾正雄氏を依頼して下さった。このかたも大変お忙しい方であるが、「ほとけ」第一章から「はげみ」第二章までの十章を丹念に訂正し細かい意見を添えて返信して下さった。

12　北原二郎氏の死去

昭和56年3月14、15両日京都の大谷婦人会館で、翻訳委員会を開き三輪、今井、山崎、脇坂、浅野の5名が集ったが二日目の午前中北原二郎氏死亡の方に一同驚愕し、東方を向って讃仏偈を唱えた。72才であった。

昨年末氏は「仏教聖典」エス訳のご自分の分担である「おしえ」第5章脱稿後脳血栓のためたおれ、東京の女子医大病院に入院加療中であった。原稿はまだ存命中美沙氏が千葉のご自宅に行きペン書の草稿、タイプのもの三種位全部を持ち帰って私の方に送られてあった。

里吉重時さんがRevuo Orientaに掲載された追悼文によると、「青年時代からエスペラントに対する情熱は非常に強く、小坂狷二先生の信頼厚く、日本大会始め大きな会合では、必ず演壇に小坂氏と並んで書記役をつとめられた。その蔭にはいつも百合子夫人が、受付会計など手際よく処理された。また、エスペラントに熱心な百合子夫人は、山手ロンド婦人部のリーダーとなり、北原夫妻はGesanktulojと呼ばれたほどであった。病魔のため百合子夫人が倒れてからは、エスペラントと旅行に大きな生き甲斐を感じ、昨年の横浜大会の仏教分科会で決定された仏教聖典エス訳の分担任務を完了した。これが彼のエスペラント界に対する最後の貢献となったのである。かならずちかでよろこんでいるにちがいない。」と。私たちは北原さんの生命を賭したこの労苦に対しても、エス訳「仏教聖典」を完全なものに仕上げなくてはならぬと考えている。

昭和55年に発表していたJBLE創立満50周年記念募金は、横浜大会の終る日に百万円に達していたが、その後も申込みがつづいて総額百十五万五千円となった。その内には、北原二郎さんの御遺族から醵金して下さった金二十万円も含まれている。

13　エス訳仏教聖典原稿伝達式

この様にして待望のエスペラント訳「仏教聖典」原稿は完成し、昭和57年6月7日東京都芝の仏教伝道協会に於いて原稿伝達式が行われた。協会側からは、会長沼田恵範師と翻訳課長鷹谷襄氏が列席され、編纂委員会からは、三輪義明、礒部晶之助、脇坂智証、佐村隆英、今井正毅、南見善、只石智津子、浅野三智の8名が出席した。

冒頭、三輪氏から美麗な箱入りの原稿正、副二通が沼田会長に渡された。この原稿の一通は印刷所に交付され、一通は、伝道協会に残されるものである。沼田会長は、85才の高齢であられるが、お顔は尚矍鑠として輝かれ、実に頼もしい方である。会長から初版は先ず1,000部を印刷、その反響を見て改版し第2版、3版と重ねて行きたいと語られた。

師は、広島県の真宗寺院に生まれ子どもの頃から仏教の世界宣布を念願していられたが、十八歳で渡米し彼の地の大学で数学を専攻、帰国して内務省に奉職された。その間仏教伝道資金の捻出を考えられ、精密測定機を考案して三豊製作所を創立、その利益を全部仏法宣布に使われることになった。仏教伝道協会が中心となり「仏教聖典」を編纂し、各国語に翻訳して各国の旅館に無料配布されてある。

現在翻訳されてあるものは、英語、フランス語、ポルトガル語、スペイン語、ドイツ語、韓国語、中国語のもので、それに現在東南アジアのものとエスペラント訳が進行中である。エスペラント訳は既に二校を終っているので早晩刊行されるであろう。

私が長男の原爆死によって志したものは、エスペラントによる仏教の世界宣布ということであったが、その念願が今まで述べ来った数多くの方々によって達成されるということはどうした有難いことであろうか。今は唯合掌感泣して其の日を待つのみである。